

國學院大學 研究開発推進機構 機構ニュース

Vol.17 No.1
 発行人 笹生 衛 卓
 編集人 渡邊
 〒150-8440 東京都渋谷区東 4丁目10番28号
 電話 (03) 5466-0104
 FAX (03) 5466-9237

**日本文化研究所 令和五年度事業計画
 宗教文化に関する研究と学術情報発信の体制構築**

事業の目的・概要

日本文化研究所は「神道・国学研究部門」と「国際交流・学術情報発信部門」の二部門を置くが、本事業は両部門を有機的に連携させ、合同事業として進めている。本事業は、旧日本文化研究所における諸事業や、文部科学省21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」事業などを経て蓄積してきた、本学の日本の宗教文化に関する研究を更に進展させ、その研究成果による学術情報を国際的にも発信していく体制を構築しようとするものであり、大枠として「学術情報の研究・整理・拡充」と「学術情報の国際発信」を行っていく。本年度が二ヶ年計画の二年目であり、まず昨年度の成果について概観した上で、本年度の研究計画を述べることにする。

昨年度の成果

「学術情報の研究・整理・拡充」について、まず旧日本文化研究所が所蔵していた雑誌の整理を進める必

要があったため、これに取り組んで一定の成果を得た。並行して過去の刊行物の電子化・整理、また目録情報の確認・修正作業を行った。これらは公開に向けた準備作業ということになる。本学図書館に所蔵されている近代の日本宗教に関する雑誌を目録化し、概要を調査した。これらは将来的に公開予定である。

また、「神道・国学研究部門」の研究成果公開の一環として、「歴史で読む国学」人名等索引」と「国学者学統関係図」をウェブサイトで公開し、また「國學院大學研究開発推進機構紀要」15号に木村悠之介「新神道とは何であったか」メディア排宗教運動としての雑誌『日本主義』」を掲載した。

「学術情報の国際発信」について、デジタル・ミュージアム上のDBのメンテナンスを行い、ウェブサイトでSNS上での情報発信を行った。コンテンツ作成として、神祭具データベースの構築を進め、神祭具の写真撮影ならびに、解説文の英語訳の確認を行った。翻訳の確認・監修は、

目次

- ◆ 日本文化研究所 令和五年度事業計画
- ◆ 「宗教文化に関する研究と学術情報発信の体制構築」(星野靖二) 1頁
- ◆ 学術資料センター 令和五年度事業計画①
- ◆ 「学術資料センター(考古学資料館部門) 事業」(深澤太郎) 3頁
- ◆ 学術資料センター 令和五年度事業計画②
- ◆ 「学術資料センター(神道資料館部門) 事業」(大東敬明・吉永博彰) 4頁
- ◆ 校史・学術資産研究センター 令和五年度事業計画
- ◆ 「校史・学術資産研究センター事業」(渡邊卓) 5頁
- ◆ 研究開発推進センター 令和五年度事業計画①
- ◆ 研究開発推進センター「研究事業「神道・日本文化の先端的研究」(宮本蒼士・木村大樹) 6頁
- ◆ 研究開発推進センター 令和五年度事業計画②
- ◆ 「SDGs」と建学の精神」研究事業 (宮本蒼士) 7頁
- ◆ 研究開発推進センター 令和五年度事業計画③
- ◆ 國學院大學「古典文化学」の創出研究事業 (渡邊卓) 8頁
- ◆ 國學院大學博物館 令和五年度事業計画
- ◆ 研究開発推進センター
- ◆ 第一回「ふろエ(共生社会×渋谷カワエ)「シブラス」東京渋谷で進む環境にやさしいまちづくり」(宮本蒼士) 10頁
- ◆ 國學院大學博物館
- ◆ 企画展「祓(儀礼と思想)——(大東敬明) 11頁
- ◆ 蒙古襲来七五〇周年を見据えて「企画展開催に向けた取り組み」(池田榮史) 12頁
- ◆ 彙報 13頁
- ◆ 事業計画・人事一覧 14頁
- ◆ 資料紹介 栗田寛書簡(木村春太郎宛) 成績の判定と口頭試問(比企貴之) 16頁

カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校のファビオ・ランベッリ教授と同研究室のメンバーが担当した。国際研究交流について、英語圏における日本研究・日本宗教研究の動向について調査し、ウプサラ大学(スウェーデン)のポズドクであるエーニルス・ラーション氏を研究員として受け入れた。

刊行物として、「國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報」第15号 (<https://www.kokugakuin.ac.jp/research/ord/jicc-publications/ar-jicc15>) を刊行し、研究論文4本(三ツ松誠「国学政治思想史研究の現在」、木村悠之介・萩原稔「大成教禊教「禊教新誌」「禊教会雑誌」「みそ、き」解題・目次」、今井功一「実行教の神道改革と海外布教——柴田礼一の朝鮮巡教と従軍布教使北條三野夫の台湾開

教」、吉永博彰「中世伊豆国三嶋社にみた神仏関係・僧侶の活動と神宮寺の展開を手掛かりに」) を掲載した。オンライン英文ジャーナル *Kokugakuin Japan Studies*, no.4 (<https://www.kokugakuin.ac.jp/research/ord/jicc-publications/kjs4-202302>) を刊行し、「日本文化の形成・変容・継承」というテーマで3本の論文を英訳・公開した。また一昨年度に開催した国際研究フォーラムの報告書となる『日本の宗教文化を撮る』報告書 (<https://www.kokugakuin.ac.jp/research/ord/jicc-publications/forum-jr2021>) を刊行した。

催事として、国際研究フォーラム「ミュージアムでみせる宗教文化」を主催した(十二月十一日)。発題者と題目「深澤太郎「来て、見て、体感する神道と日本の宗教文化」、熊

谷貴史「展示するモノと展示するコト・仏教文化の視点から」、下園知弥「キリスト教展示の現状と課題…諸教会の文化をいかに展示するか?」、エミリー・アンダーソン「強制収容所内の信仰と宗教…アメリカの日系人博物館を通して考える日系人の多様な宗教経験」、北原モコトウナシ「アイヌ文化展示が照らす日本・東アジアの宗教」、コメンテーター・田澤恵子、高橋典史)。開催事については、企画・準備から開催まで、國學院大學博物館との有機的な連携を通じて実施し、関連催事として博物館の特別展の見学イベント等をも実施した。また「研究者のための撮影術3—アウラの行方」(十二月十日)、「宗教文化士の集い」(二月二十五日)を共催した。

研究会として、オンラインで日本文化研究所研究会を九回、公開研究会を一回開催し、対面で学内研究会を一回開催した。

日本文化研究所研究会

- ・長見菜子「古事記」「軽太子物語」の諸問題—文章表現からみる寓意性—(六月六日、共催・國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センター)
- ・川嶋麗華「近現代における火葬習俗の変遷—遺体処理にみる伝承性—」(六月二十日)
- ・藤井修平「ビッグ・ゴッド理論の検討—宗教認知・進化学的展開の側面として—」(七月二十八日)
- ・木村悠之介「近代神道雑誌史・出版史の新たな展望」(八月二十五日)
- ・武井謙悟「開帳の近代—近世との連続/断絶」(十月二十七日)
- ・大場あや「葬儀・墓をめぐる国家政策と改革運動の展開—日中比較

研究に向けて—(十一月三十日)・萩原稔「井上正鐵の三宅島における活動とその影響」、コメンテーター・三ツ松誠(二月二十一日)・鳴海あかり「丑の刻参りの形成・発展・変化」、高田彩「宗教集団の運営における宗教的職能者の家族が担う役割—シヤドウ・ワークを軸として—」(三月七日)・宮澤安紀「現代日本における遺骨への態度をめぐって—遺骨の両義性と手元供養品」、小高絢子「現代の仏教寺院における信仰の諸相—堀之内妙法寺の参詣者の語りから—」(三月二十八日)

公開研究会

- ・ドリユー・リチャードソン「電波な声…復帰前沖繩における怪情報、抵抗、メディア」、コメンテーター・崎濱紗奈(七月七日)

学内研究会「島嶼部の伝統芸能をめぐる諸問題」

- ・柳原(壬生)友子「島の内からの目・外からの目—三宅に暮らす知恵としての信仰を伝えてゆきたい—」、コメンテーター・橋本裕之(二月二十七日)

続けて「学術情報の研究・整理・拡充」と「学術情報の国際発信」について、それぞれ本年度の研究計画の概要を記す。

学術情報の研究・整理・拡充

- ①学術情報の一覧化・電子化
旧日本文化研究所と21世紀COEプログラムにおいて蓄積されてきた日本の宗教文化に関する学術情報について、あらためて目録化と整序作業を進め、記録として保管されてきて

いる資料群の電子化を進める。また、本学が持つ学術情報を公益に資する形で公開するための準備作業の一つとして、本学図書館に所蔵されている近代の神道・国学関連雑誌の調査を進め、優先度の高い重要な資料について電子化を行うことを検討する。

②学術情報の公開に向けた連絡・調整

旧日本文化研究所と21世紀COEプログラム、また研究開発推進機構において蓄積されてきた学術情報について、オンラインで広く公開することを念頭に置いて、これを行うために必要な手続きを検討の上、連絡・調整作業を行う。公開については本学機関リポジトリへの登録を並行して進める。

③研究の推進と宗教文化教育の教材開発への展開

日本の宗教文化に関する研究を進め、既存の学術情報を拡充していく。具体的には、靈魂観・死生観に焦点を合わせ、その複層的な「思想」と「実践」を考察することを課題とし、現地調査などを行い、民俗学・宗教学など多角的な視点からの検討を試みる。公開された学術情報について、より公益に資することを念頭に置いて、宗教文化教育の教材開発へと展開させていく。

「学術情報の国際発信」

- ①デジタル・ミュージアムとの連携
本学諸機関と連携してデジタル・ミュージアム (<https://d-museum.kokugakuin.ac.jp/>) の運営を推進する。また Encyclopedia of Shinto (<https://d-museum.kokugakuin.ac.jp/eos/>) など既にデジタル・ミュージアム上で公開している学術情報を拡充していく。

②ウェブ上での情報発信

運用中の日本文化研究所のウェブサイト (<https://www.2kokugakuin.ac.jp/ordjicc/>) や、神道と日本の宗教文化に関する情報を英語で発信するためのポータルサイトである Shinto Portal (<http://www.2kokugakuin.ac.jp/e-shinto/index.html>) において、掲載コンテンツを拡充して学術情報の蓄積・発信を推進していく。また、対外的な発信については Facebook や Twitter といった SNS も活用する。

③国内外の研究者・研究機関との交流・連携

日本の宗教文化研究に関わる研究者・機関について情報を集積し、交流・連携を図る。英語圏の研究者と協力して、研究成果を英語化して発表する。

④研究成果発信のための催事の開催

定期的に研究会を開催し、研究員による研究発表などを通じて、本事業の研究成果を広く発信していく。また外部から講師を招いて知見を深め、事業のより円滑な推進につなげる。

その他

本年度も、国際研究フォーラムを開催し、国際的な学術交流を推進することを計画している。

なお、定期刊行物として『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』と *Kokugakuin Japan Studies* を刊行し、また昨年度の国際研究フォーラムの報告書を作成する。ウェブサイトを SNS も引き続き運用し、本事業の成果を公開していく。

(文責・星野靖二)

学術資料センター 令和五年度事業計画① 学術資料センター(考古学資料館部門) 事業

事業の目的

本学の共同利用研究機関である学術資料センターは、昭和三年(一九二八)に設けられた「考古学標本室(後の考古学資料館)」と、昭和三十八年に開設された「神道学資料室(後の神道資料館)」を前身とし、國學院大學博物館における大学ミュージアム活動の中核を担っている。当部門は、世界の中における日本文化の位置付けや、その起源・展開を追及するために、考古・民俗・歴史資料の収集と、主に祭祀遺跡を対象とした調査・研究を進めてきた。

本「学術資料センター(考古学資料館部門)事業」は、旧考古学資料館より継承している考古・民俗資料研究、旧日本文化研究所「学術フロンティア構想」以来の資料デジタル化研究、旧伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクトを引き継ぐ祭祀考古学研究、同「國學院の学術資産に見るモノと心」の一部を継承した歴史資料研究を網羅する大規模なものである。

事業の概要

①整理保管

列品台帳の増補と、主要収藏品目録の作成を進め、列品保存・管理システムの充実を図り、中長期的な資

料収集・修理計画を策定・推進するとともに、必要に応じて館蔵資料の解体修理も実施する。

②調査研究

学史的な重要資料や、纏まった資料群の調査研究を推進し、その学術情報を逐次公開するとともに、将来的な「重要資料学術調査報告書」の刊行に備える。加えて、本学における考古学・民俗学・歴史学研究の歩みを継承し、特定テーマを設けた調査研究事業を実施する。さらに、祭祀遺跡DBの構築(当面は文部科学省科学研究費助成事業新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類史学」との連携で推進)と、館史編纂に取り組む。

③教育普及

デジタル画像を伴う特定資料目録を作成し、WEB上で公開。『石上』『漢代物質文化資料図説(邦訳)』など、館蔵文化財に関する書籍を刊行。研究成果全般について、國學院大學博物館における展示活動で公開する。

④学芸職員実践教育

学部・大学院と連携し、館務を担う臨時雇員に学生等を任用。具体的業務を実践することで専攻生を育成し、専門職へのキャリアデザインを提供する。また、山梨県埋蔵文化財

センター等の協力を得た実地教育も推進する。

整理保管

計画的な館蔵資料の収集と、昭和三年から作成してきた「列品台帳」をもとに、「収藏品総目録」を整備する。具体的には、不断に根本となる「列品台帳」の点検を繰り返すとともに、一昨年度デジタルミュージアムにて公開した「縄文土器」「和鏡・柄鏡」や、順次データ追加中の「社寺等絵葉書資料」をはじめとする主要収藏品目録に加え、研究者個人資料(柴田常恵資料・神林淳雄資料・柳田康雄資料・吉田恵二資料・齋藤ミチ子資料など)のデータベイス化を進める。具体的には、「土偶」

「石棒」「弥生青銅器」「祭祀遺物」「埴輪」「古鏡」「古瓦」「骨蔵器」「經典・経筒・外容器」「板碑」「鞍山中旧蔵資料」「民具」と、「神林淳雄資料」「柳田康雄資料」「齋藤ミチ子資料(部分)」「社寺等絵葉書資料」などについて、デジタル化・メタデータ作成を進め、令和七年度(二〇二五)までに目録を順次公開し、同八年度に「収藏品総目録」の完成を期したい。また、この過程で、台帳・目録に沿って収蔵資料の適切な収納・保管環境の整備を図っていく。

調査研究

これらと並行して、完結した「紀年銘和鏡の集成研究」に続き、「神社境内祭祀遺跡の研究」「古墳出土資料の研究」「伊豆地域の宗教考古学的研究」「蒙古襲来の考古学的研究」「柴田常恵資料の研究」などを

推進する。とりわけ、「神社境内祭祀遺跡の研究」では、福島県建鉾山遺跡の三次元測量調査を行い、館蔵出土資料の再整理成果と共に、過去の調査成果を検証してゆきたい。また、三宅島・下田白濱・三島を中心に取り扱う「伊豆地域の宗教考古学的研究」では、現地の歴史・考古・民俗の総合研究を深め、古代三嶋神から中世三嶋大明神への軌跡を追求する。「蒙古襲来の考古学的研究」は、神道資料館部門をはじめとする機構内・学内他機関とも連携し、外部資金の導入も目指しつつ、次年度の文永の役七五〇年を記念した特別展の準備も進めるものである。

教育普及

成果の公開としては、デジタルミュージアムによるWEB公開・刊行物発行・博物館展示を実施する。「社寺等絵葉書資料」は、この令和五年度を以て全データ公開を完了させる。「柳田康雄写真資料」の公開や、『漢代物質文化資料図説(邦訳)』刊行は、新型コロナウイルスの影響で遅れが出ているものの、中学時代の大場磐雄が制作していた同人誌『石上』の翻刻は、茂木雅博客員教授のお力添えを得て今年度刊行したい。なお、博物館展示としては、当センターの神道資料館部門と共同で実施する「三嶋の神のモノガタリ」展、歴史地理学研究室に協力しての「マラッカを越えて」、および内川科研と連動した「好古家の実相」展なども計画している。

(文責・深澤太郎)

学術資料センター 令和五年度事業計画② 学術資料センター(神道資料館部門) 事業

事業目的

学術資料センター(神道資料館部門)事業は、本部門が所管する学術資産の整理・保存・研究を継続し、研究・教育などに活用できる体制を整えることを目的とする。また、あわせて本学が所蔵する神道に関わる資料の研究・展示も行う。

右で得られた成果は、本部門の刊行物、國學院大學博物館での展示、國學院大學博物館Online Museum、デジタル・ミュージアムを通して、学内外と共有する。

これらにより、研究開発推進機構内において、神道史や祭祀の研究、それに関する本学の学術資産の調査・研究・展示を含めた活用を促進する役割を担う。

前年度の成果

①資料調査・展示公開

宮地直一博士旧蔵天神人形及び熊野関係資料の調査を行った。この成果は、特集展示「宮地直一と熊野信仰研究」、同「宮地直一と天神信仰」で公開した。これらの詳細については、本誌三二号(vol.16 No.2)「宮地直一旧蔵資料の調査・研究・展示」で詳述した。

また、令和五年度に開催する企画

②

展「祓―儀礼と思想―」のための研究会・資料調査なども行った。

この他、東京農業大学「食と農」の博物館で行われた「荒川弘〈百姓貴族〉× TOKYO NODAI 2022」(会期：令和四年十月十四日～令和五年三月四日)に協力し、信仰に関わる展示パネル、資料解説などを執筆した。

②刊行物

平成二十九年度以降、本部門で刊行してきた冊子に掲載した項目を見直し、再整理した上で、学術資料センター編『神道の祭りと歴史』としてまとめた。同書は「祭祀・祭礼の変遷」「資料で見える大嘗祭」「祓の信仰と系譜」より構成した。このうち、「祭祀・祭礼の変遷」は『祭祀・祭礼の変遷―古代・中世を中心に―』(平成二十九年)、『四季の祭りと神道の歴史』(令和二年)ほかをもとにしているが、新たな知見を加えて改めたものも多い。「資料で見える大嘗祭」は平成三十年、「祓の信仰と系譜」は令和元年に刊行した同名の冊子をもとにしている。

③その他

令和二年度よりはじめた、『延喜式』祭祀関連条文の集成について、

見直しと取りまとめを行い、今後の公開を含めた活用方法についての検討を開始した。

資料のデジタル化については、これまで、國學院大學図書館デジタルライブラリーにおいて、本部門所管資料の絵画資料を公開していた。令和四年度、これを国全体でとりくんでいるJapan Searchに接続し、広く使っていただけるようにした。

令和五年度の事業計画

令和五年度は、これまで本部門が行ってきた学術資産の整理・調査・研究を継続する。特に、学術資産の管理を目的するためのデータベース構築を前提とし、資料の撮影、翻刻などを行う。

また、本学が所蔵する宮地直一旧蔵資料、西田長男旧蔵資料の整理・調査・研究を継続し、彼らの研究と旧蔵資料との関わり、研究内容の学史上における位置づけなどについて研究を進める。

特に、令和二年度に調査・研究に取り組み始め、令和四年度に特集展示「宮地直一と熊野信仰研究」を行った、熊野信仰に関する研究を継続する。これは、宮地直一の研究のうち、『熊野三山の史的的研究』(熊野三山を中心としたる神社の歴史の変遷)の重要性、西田長男の研究の中でも熊野信仰・熊野参詣が取り上げられていることによる。

『延喜式』祭祀関連条文の研究を継続し、これを中心とした古代祭祀についての研究を行う。さらに、そ

れ以降の祭祀・熊野信仰を含めた神祇信仰・神観念・祓の変遷、神道思想の形成、密教や陰陽道との関わりへも視野を広げ、十世紀～十三世紀の神道史について再検討を行う。これらについては、本学研究開発推進センターと共同しながら、継続的に皇學館大学 研究開発推進センターと連携することを想定している。

展示では、國學院大學博物館で行う企画展「祓―儀礼と思想―」の企画・実施を担当し、また、考古学資料館部門とともに、伊豆三嶋信仰に関する展示を実施する。

企画展「祓―儀礼と思想―」については、別に詳述するので、ここでは、後者の展示について述べる。

伊豆三嶋信仰は主として、伊豆諸島・同半島の造成神・守護神である三嶋神(と眷属神)に対する信仰をいう。本学では二十世紀初頭の大場磐雄博士以来、現代に至るまで、考古学的な、あるいは神道学的な観点から、その研究に伝統的に取り組んできた。本展示では、近年の研究成果も踏まえて伊豆三嶋信仰を改めて捉え直し、時代に応じた変遷・様相を示すことを目的とする。さらに、こうした人文科学的な理解にとどまらず、(一社)美しい伊豆創造センターとの協働を通じて、伊豆諸島・同半島における噴火・造成の仕組みほか自然科学的な知見を反映して、古代の神祇信仰成立の背景を読み解くことも企図している。

(文責：大東敬明・吉永博彰)

校史・学術資産研究センター 令和五年度事業計画 校史・学術資産研究センター事業

事業目的

校史・学術資産研究センターは、校史研究部門と学術資産研究部門の二つの部門で構成され、國學院大學の歴史および本学の学術資産にかんする研究をおこない、その成果を博物館の展示や本センターの機関誌などでの発表を通じて公開・発信することにより、広く社会に還元することを目的として設置された。

校史研究部門では、校史資料の整理・調査・研究を通じて、大学アーカイヴの基盤の整備を進め、自校史の再検討に取り組む。また学校史の編纂や自校史教育用テキストの作成などもおこなう。

学術資産部門では、本学所蔵の貴重資料をはじめとする学術資産の調査・研究を通じて、学術資産の活用を具現化するための体制の整備をおこなうとともに、その学術的価値を学内外に周知する。

これまで両部門はそれぞれ独立した事業を立ててきたが、今後は本センター所蔵の校史資料にかんする学内用データベースの構築に向けた目録の整備や、博物館における校史や学術資産に関連した資料の展示にかかわって両部門を関連させて推進していく必要があることから、令和四

年度から両部門の事業を統合した単年度計画「校史・学術資産研究センター事業」として推進している。

前年度の事業成果

校史にかかわっては、数年来の継続的かつ基幹的事业である校史資料の整理と目録作成に従事し、校史資料を中心とした学術資産の学内用データベースの整備に向けたデータ整理にも取り組んだ。

また本学創立一四〇年の周年記念事業には、本センターとして①『國學院大学一四〇周年記念誌』の制作、②企画展「近代工芸の精華―有栖川宮家・高松宮家の名品と金子皓彦 寄木細工コレクション」の開催を担当した。①では編纂業務の全般を担当した。②では本学収蔵の近代美術工芸史的にも貴重な有栖川宮家・高松宮家ゆかりの漆工・金工作品を展示した。複数のメディアに取り上げられ、多数の来館者を得るなど大きな実績を残した。

さらに学内における自校史関連の研修を担当するほか、「神道と文化」科目のサブテキスト「國學院大學の歴史」について、創立一四〇周年を迎えたことを踏まえた改訂を施した。

一方、学術資産関連では、本センター所蔵の本学卒業アルバムについて、これを目録化した。今後は、順次デジタルデータ化を進め、将来的にデジタル資料として活用する方向性についても検討をおこなっていく。なお、皇典講究所創立五〇周年を記念して作成された『皇典講究所創立五十年記念』も、これをデジタルデータ化した。これらの日常業務を通じて得られた知見は、さらに調査・研究を進め、その成果は本センター刊行物を通じ発表した。

なお、学内外からの校史あるいは学術資産にかんする問い合わせには随時対応した。

例年、本学図書館との協働で更新している図書館デジタルライブラリーについては、不忍文庫本「日本霊異記」、「藤波家文書」のうちシユタイン講義録、また「近世吉田家文書」朝儀図巻、「熊野縁起」「熊野の本拠」といった典籍・古文書の書誌および解題作成を担当した。

本年度の事業計画

本年度も単年度計画の「校史・学術資産研究センター事業」として事業を推進していく。そのなかでも基幹業務となるのは、校史資料を中心とした学術資産の調査・研究の継続と学内用データベースの整備に向けたデータ整理、博物館における校史・学術資産関連資料の展示作業への従事などである。

またこれまで「(國學院科目)國學院大學の歴史」のサブテキストと

して利用されてきた『國學院大學の歴史』を、次年度の頒布に向けて大幅に内容をリニューアル(内容検討・編集)することも業務上大きな比重を占める。

一方で学内外からの本学の校史にかんする問い合わせへの対応や、自校史にかんする学内研修については引き続き担当する。また図書館所蔵の貴重史(資)料をはじめとした学術資産の調査・研究と、その成果を図書館ホームページ上のデジタルライブラリーにおける解題として公開する。本センター所蔵資料のうち資料保存・公開の観点からその意義を認めうるものについて、所管資料のデジタル化を進めていく。

なお、これらは「学校法人國學院大學 中期五ヵ年計画」の「【戦略3】建学の精神に基づく、日本を学ぶ体系的なカリキュラムや研究を推進する環境の整備」のうち、令和六年度から予定される「國學院大學一五〇年史」の編纂作業と、DXを利用した研究成果・学術資産の活用と公開・発信環境の整備を念頭に置くものである。

本センターの事業を通じて得られた新たな知見や研究の成果は、博物館での展示や機関誌である『國學院大學 校史・学術資産研究』『校史』をはじめとした、各種学術雑誌などでの発表を通じて公開・発信し、そして社会へと還元していく。

(文責・渡邊 卓)

研究開発推進センター 令和五年度事業計画①
研究開発推進センター研究事業「神道・日本文化の先端的研究」

事業の目的・概要

本事業は、学校法人國學院大學中期五カ年計画に従い、「日本」を知る教育研究の推進と発信」を実現すべく、これまで培ってきた研究蓄積を基盤に「神道・日本文化の先端的研究」を推進することを目的とする。これにより、新たな国学的研究による拠点機能の拡充を目指すものである。

事業内の各計画は、次の六本の柱を念頭に遂行していく。

- ① 本事業を推進するための学際的・国際的研究拠点の構築
- ② 神道・日本文化にかかる近年の研究の概括と課題抽出
- ③ 神道・日本文化に関する基礎資料の作成
- ④ 神道・日本文化関係資料の調査・保存・活用
- ⑤ 研究開発推進センター研究会の企画・運営
- ⑥ 刊行物等による研究成果の社会発信

なお、本事業は、院友神職会をはじめとする神社界からの指定寄付金に基づく研究事業として実施される。

前年度の成果

本事業の初年度にあたる令和四年

度は、学外の研究機関・組織、機構各機関との連携を見据え、主として前年度までの事業の継続と本事業の基盤整備を行った。主な成果は次のとおりである(それぞれ該当する上記柱の番号を付した)。

- (一) 神社本庁総合研究所との連携による、『皇国時報 総目次』の冊子化準備作業。研究員・臨時雇員(うち一名は神社本庁指定寄附金による雇用)によるデータ入力及び確認作業を実施(①③)。
- (二) 学術資料センター(神道資料館部門)との連携・協力による、令和五年度國學院大學博物館企画展・特集展示の準備。専任・兼任の教員や研究員が展示資料の調査・選定等を実施(①④)。
- (三) 「明治期神社関係法令資料集成(仮)」の調査・作成作業(③)。
- (四) 労務委託による「近代神社社格昇格関係資料」の整理・リスト化(④)。
- (五) 研究開発推進センター研究会の企画・開催(⑤)。
- (六) 『研究開発推進センター研究紀要』第十七号(令和五年三月)の編集・刊行、及びこれまでのセンター刊行物のリポジトリ公開に向けた基礎作業(⑥)。

上記のほか、乃木神社からの依頼に基づき、『乃木神社御鎮座之記』の執筆・編集作業を実施した(令和五年度刊行予定)。

本年度の計画

こうした前年度の成果を踏まえ、本年度はこれらを継続・展開しつつ、主に次の事業を推進する。

- (一) 基礎資料の作成 上記(一)に続き、令和五年度の刊行(神社本庁総合研究所)に向けて校正作業を行う。また、上記(三)を継続し、神社本庁総合研究所と連携しながらデータを拡充し、書籍刊行など令和六年度以降の成果公開の方法を検討する(①③)。
- (二) 資料の調査・保存・活用 上記(四)の「近代神社社格関係資料」の整理・リスト化を継続する。また本学所蔵の学術資産を利活用すべく、「宮地直一コレクション(和装本)」の再確認・調査を行う。これには資料の内容に応じて、機構内の専任・兼任教員、また学内外の幅広い研究者から専門的な知見を仰ぐ。このうち善本ならびに神道研究を進めるにあたって特に有益と考えられる文献については、書誌情報を整理し、解題を執筆して『研究開発推進センター研究紀要』上で公開していく(①②④⑥)。
- (三) 研究開発推進センター研究会の開催 外部研究者の招聘も積極的にを行い、広く研究交流を行うこと。また、下記(V)とも関連し、対面

もしくはオンライン形式にて成果の公開を行う(①②⑤)。

(四) 『研究開発推進センター研究紀要』第十八号の編集・刊行 事業成果の公開を行い、上記(二)の善本解題も掲載する。また、上記(六)に続き、センター刊行物のリポジトリシステム上での公開に向けた作業を段階的に行っていく(⑥)。

(五) 皇學館大学研究開発推進センターとの連携 本学と皇學館大学双方の研究について、特に皇室祭祀・神宮祭祀の面で、近年の研究を概括し、神道の総合的研究を推進すべく、交流・連携を図っていく(前年度末に打ち合わせ及び資料調査のための出張を実施した)。古代・中世の部分の調査・研究については、学術資料センター(神道資料館部門)の協力を受けて実施する。その成果は、今年度中に皇學館大学の教員を招聘し、本学の教員・研究員と合同での神宮関連の研究会を開催し、公開する予定である(①②④⑤)。

(六) 國學院大學博物館の展示に関する資料調査・解説および図録等刊行物の作成協力 上記(二)に続き、本年度の企画展「祓・儀礼と思想―(五月二十日〜七月九日)・「論語 for beginners」(七月十五日〜九月十八日)、神道展示室特集展示「垂加神道」の開催にあたり、専任・兼任の教員や研究員が各作業に参画する(①④)。

(文責・宮本誉士・木村大樹)

研究開発推進センター 令和五年度事業計画② 「〈SDGs〉と建学の精神」研究事業

本事業の目的・概要

本事業は、本センターにおいて実施してきた「渋谷学」などの成果を基盤として、国連「SDGs」(持続可能な開発目標)を本学の「建学の精神」から考察する研究を推進するとともに、その研究成果や取組み等を本学の教育活動や社会貢献・地域連携へと展開し、「共生社会を創り出す人材の輩出」(学校法人國學院大學中期五カ年計画)に研究面から寄与することを目的とする。

本年度は、五カ年計画の二年目として、昨年度に引き続き、研究調査、学内外の連携などの基盤整備を進めるとともに、社会発信、教育還元の内方より一層具体的に検討・推進していく計画である。そのため、次の五つの項目を念頭に研究事業を実施していく。

- ① 建学の精神から「SDGs」を考える理論的な研究を推進する。
- ② 学内における取り組みを集約するためのプラットフォーム構築を目指す。学内の連携を行なう。
- ③ これまでの研究成果を再構築し、学外協定等を加味して、社会貢献・地域連携に積極的に活用する方途を模索する。

- ④ 「SDGs」と関連する社会的問題についての研究を行ない、広く社会貢献・地域連携に資するプロジェクトを構想する。
- ⑤ 上記①から④の研究成果を学部教育に還元する。

昨年度の成果

五カ年計画の一年目となる令和四年度事業においては、本事業の目的に基づき、関連文献の調査・目録作成などを推進するとともに、成果公開、教育活動、社会貢献・地域連携への展開方法などを検討した。

具体的には、本事業の一環として、研究開発推進センター公開講演会「国連SDGsの役割と人類社会の行方〜共存・共生の未来〜」を実施したほか、持続可能な社会の形成を目指すシブヤサステナブル推進協議会(「渋谷区環境基本計画2018」との連携を行ない、第一回しぶカフェ「シブサスー東京渋谷で進む環境にやさしいまちづくり」)を開催した。いずれも録画配信によって本学HPに公開したものである。

学部教育への還元については、本事業の一環として実施する、オムニバス授業「共存・共生の思想」(令和四年度前期)において、関連する

SDGsのゴール・ターゲットを揭示し、日本・世界の諸課題と持続可能な社会との関連性を考える授業を実施した。また、「國學院の学び(渋谷学)」(令和四年度後期)においても、本事業の講演会動画等を参考動画として活用した。

その他、S・SAP協定による渋谷区との連携として、渋谷ハチコウ大学・大学連携講座「渋谷区制九十年記念講座 渋谷区の誕生」を開講するとともに、次年度以降の連携事業に関する協議を行なった。

本年度の事業計画

右に掲げた昨年度の成果を基盤として、本年度事業においては、SDGsを考える理論的な研究推進のための調査及び文献目録の作成を実施するほか、次のような事業を展開する計画である。

まず地域連携の一環として、昨年度に引き続き、シブヤサステナブル推進協議会関係者を講師に招き、「しぶカフェ」第二弾を開催する予定である。これは、持続可能な渋谷をテーマに実施する企画であり、広報課の協力による本学HPでの録画配信により公開する。その録画内容は、本事業の関連授業においても配信を行ない、学部教育へと還元する計画である(「共存・共生の思想」(國學院の学問(渋谷学))。

また、本年度は、「渋谷学」の成果に基づき、エクステンション事業課のオンライン公開講座として「渋谷を科学する―「渋谷学」」を行な

う。これは、地域連携の一環として、S・SAP協定による渋谷区との連携事業である、渋谷ハチコウ大学・大学連携講座としても公開するものである。

学部教育への還元については、昨年度に引き続き、オムニバス授業「共存・共生の思想(持続可能な社会を目指して)」(令和五年度前期)を開講し、本学教員及びゲスト講師によるSDGs関連講義を実施する。

また、右授業の続編として、新たにオムニバス授業「共存・共生の思想(持続可能な社会への取り組み)」(令和五年度後期)を開講する。これは、講義+ディスカッション形式により、SDGsの具体的取組みの理解を深め、諸課題の解決方法を考える授業として設計している。持続可能な地球社会の実現を目指す認定NPO法人・開発教育協会をはじめ、渋谷区男女平等・ダイバーシティセンター(S・SAP協定による連携)、ボッシュ株式会社等を講師に招いて実施する予定である。

オムニバス授業「國學院の学問(渋谷学)」(令和五年度後期)においても、従来の講義に加え、SDGsのゴール・ターゲットを掲示して渋谷の諸課題を考える講義を行なう。なお、本年度の成果公開については、第一回しぶカフェの記録、「共存・共生の思想」の講義記録、構成員によるSDGs関連論文などを学内の媒体に掲載し公開する予定である。

研究開発推進センター 令和五年度事業計画③ 「國學院大學「古典文化学」の創出研究事業

事業概要・目的

本事業は、國學院大學が平成二十八年度文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」(タイプB:世界展開型)として選定された「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信―で実施してきた研究事業を継承するもので、令和三年度研究事業「神道と日本文化の創造的「古典学」―令和の新しき国学研究―基盤整備事業」の後継事業にあたる。中期五カ年計画のもと、日本と日本文化に関する教育・研究環境の整備のため、本事業を研究開発推進機構の諸機関を横断する研究事業として、その推進をマネジメントするものである。

本事業では、「国学」に由来する本学の特徴ある教育・研究をより一層、発展させることを目的とする。そのため、「古典」のうち特に『古事記』『万葉集』を対象に、歴史学・文学・民俗学・考古学などの総合的かつ学際的・国際的な研究アーリーナを構築し、「古典文化学」の基盤として「国学」の現代的な意義の再検討を行い、その成果を教育にも還元する。これにより「古典」研究の拠

点として本学のブランド力をさらに強固なものとする。

事業内容

本事業は、中期五カ年計画のもと五年間にわたり以下の事業を行う。

- ①「古典(「国学」を含む)」を対象とするグローバルな学術研究ネットワークの拠点(共同研究の場)を形成するため、国内外の「古典」や「日本文化」研究者及び学会や学外の研究機関等と連携をし、国際シンポジウム等を開催して学術交流を活性化化する。
- ②「古典」、特に『古事記』『万葉集』を対象として緻密な文献学的研究を基軸とする総合的な観点から研究を推進する。
- ③本学の学術蓄積の由来となつて

いる「国学」による「古典」研究を、近世から現在に至るまでの研究史を踏まえ再検討を行う。

④「古典文化学」の研究成果を専任・兼任教員の担当する教育科目に還元し、若手研究者の育成を図る。

⑤新たに「古典学総合DB」を構築し、研究成果のWeb発信等を通じて教育還元や社会的波及を行う。

⑥博物館展示、書籍の出版による研究成果の社会発信を展開する。

以上六つの事業を推進すること
で、本学の「古典」研究をより一層
発展させる。

本年度の事業計画

五カ年計画の二年目にあたる本年度は、これまでの成果をもとに以下の研究事業を遂行する。

- ①学術交流の活性化を図るために、昨年度から計画して来た九州地方の神社と神話をテーマとしたシンポジウムの開催に向けて、関係する神社との打ち合わせなど準備を進め、「古典」の学際的・国際的研究拠点としての役割を実質化する。
- ②『古事記』『万葉集』の総合的

観点からの研究のため、定例の研究會を開催し、学術交流及び研究蓄積の拡充を図る。また「古事記学」以来の『古事記』注釈・英訳を進めると共に、各種データベースの作成を継続して進める。全三三八件に及ぶ神名データベースを完成させ、公開することで研究成果を社会に発信する。『万葉集』については、創立一四〇周年記念事業で実施する万葉集全注釈である『萬葉集正義』第一巻の出版事業をマネジメントする。

③「国学」による「古典」研究の再検討のため、定例の研究會を開催し、「古典」と「国学」の研究を架橋することで「国学」の現代的意義を考へる研究を展開することを目指す。また昨年度から公開を進めていた賀茂真淵『万葉新採百首解』(京坂二書肆版)の更新及び学内の国学関連資料(井上氏旧蔵資料)の整理

を継続する。「井上氏旧蔵資料」については本年度内での簡易目録の完成を目指し、近世・近代国学者の人的・知的ネットワークの再検証を行うための体制を構築する。

④若手研究者の育成を図る一環として、「古典文化学」に関わる研究成果を専任・兼任教員の担当する教育科目に還元する。

⑤「古典文化学」の研究成果を、Webを中心として発信するため、「古事記総合DB」の拡充による「古典学総合DB」構築のための基盤整備を行う。前年度に「古事記系図」をPDFで公開したが、利便性をさらに高めるために、Web上で操作できるように改修を行う予定である。また各種データベースの補填・更新を継続する。

⑥『古事記』注釈・英訳を『國學院大學研究開発推進機構紀要』一六号に掲載し、「古典文化学」の事業成果を公開する。また博物館展示や関連書籍の出版等について検討を行う。

(文責・渡邊 卓)



令和4年度公開の古事記系図

國學院大學博物館 令和五年度事業計画

事業の目的

國學院大學博物館は、建学の精神に基づいた日本文化に関する学術資料を広く調査研究、収集、分類、保管、展示するとともに、学術研究成果の公開・発信を行い、もって研究教育の支援及び社会貢献に資することを目的とし、(Ⅰ) 展示公開、(Ⅱ) 教育普及、(Ⅲ) 環境整備・営繕、(Ⅳ) 運営支援の四つを軸に事業を推進する。

本年度は、前年度までに実施してきた博物館の基盤強化のための施策(展示の再構成、多言語化、ミュージアムショップの運営、環境整備)を継続するとともに、博物館での展示にオンラインミュージアム、デジタルミュージアムを連携させた総合的な運用を目指す。これにより、より多角的な研究成果・学術資産の発信を行う。

本年度事業の概要

(Ⅰ) 展示公開

本学の学術資産を活用し、研究成果を本学学生・社会に対して公開するため、次の展示を行う。

(1) 常設展示

a. 三つの展示室(考古、神道、校史)において、主に研究開発推

進機構の各機関と協働しつつ実施する。

b. 定期的な、展示替えを行う。

c. 展示構成、解説などについて、継続的に改善、変更、拡充を図る。

(2) 特別展・企画展

本学の学術資産、研究成果、学術的・組織的ネットワークを活かしたテーマ性を有する展示を計画・実施する。

(3) 特集展示等

特別展・企画展と同様の目的と役割を担う小規模な展示を、各展示室や博物館ホールで実施する。

(Ⅱ) 教育普及

研究開発推進機構を含め、本学の研究成果を本学学生のみならず、広く社会に対しても公開し、もって社会貢献・地域連携の強化を行うため、各展示に関連したイベント(オンライン含む)を実施する。

(Ⅲ) 環境整備・営繕

資料の活用と保存を両立させるため、展示・保管空間の環境を適切に保ち、借用資料を含めた展示・保管資料の保護を行う。併せて、施設内の衛生環境を整備・維持する。

(Ⅳ) 運営支援

博物館の情報をホームページやS

NS等で随時公開する。更に、ミュージアムショップでも、展示図録や本学の研究成果に関係する書籍、グッズなどを販売することにより、展示への興味を深めてもらい、利用者の満足度やリピート率の向上を図る。以上の施策による情報発信、評価や口コミにより、知名度の増進などを狙う。

実施計画

(Ⅰ) 展示公開

(1) 常設展示

a. 展示替えを行う。
b. 展示解説の部分的な変更を行う。
c. デジタルミュージアムとの連携を強化する。

(2) 特別展・企画展

本年度の特別展・企画展は次の通り。

a. 春の特別列品「國學院大學図書館の名品」―土御門家がみた宇宙―江戸時代の天文観測―
b. 企画展「祓―儀礼と思想―」
c. 企画展「論語 for Beginners―『論語』と格闘した江戸時代―」
d. 特別展「三嶋の神のモノガタリ―火の島から武士の神へ―」
e. 企画展「馬拉ッカを超えて―ポルトガル地図学の16世紀―」
f. 特別展「好古家の実相―北武蔵 青山村の豪農根岸家伝来の文化財―」

(3) 特集展示等

特集展示・季節の展示等を各展示室で実施する。

(Ⅱ) 教育普及

特別展・企画展毎に、展示解説やミュージアムトーク等の動画コンテンツを制作。オンラインミュージアムとして配信し、博物館利用層の拡大を目指す。

(Ⅲ) 環境整備・営繕

展示室や収蔵庫などにおける空気質・温湿度維持のための測定評価と、虫菌害を予防するための総合的有害生物管理(IPM)を行う。また、館内の衛生環境を維持するため、感染症対策も含めて、消毒と清掃を日常的に実施する。

(Ⅳ) 運営支援

ホームページ・SNSによる情報発信を推進し、また、来館者情報の分析を通して運営の改善を行う。更に各方面への広報活動、ミュージアムショップでの図録や本学・博物館関連商品の販売(店頭・配送)などに加え、英語による展示解説の充実と発信を行う。

令和四年度は、特別展を一回、企画展を四回開催し、年間の総来館者数が三万六六〇二人を記録した。コロナ禍で低調となっていた来館数が復調の兆しを見せている。

本年度は、博物館での展示にデジタルコンテンツやオープンデータ等を融合させた取り組みに加えて、東急プラザ渋谷や、美しい伊豆創造センターなど、外部と連携した企画も展開し、多様な形での社会貢献を目指していく。

(文責・國學院大學博物館)

研究開発推進センター 第一回しぶカフェ (共生社会×渋谷カフェ) 「シブサスー東京渋谷で進む環境にやさしいまちづくり」

開催趣旨

研究開発推進センターにおいて実施する「(SDGs)と建学の精神」研究事業においては、令和四年度事業の一環として、第一回しぶカフェ(共生社会×渋谷カフェ)「シブサスー東京渋谷で進む環境にやさしいまちづくり」を開催した。

開催方法は、多くの方に視聴頂くために、動画の録画配信とし(本学HP上に動画URLをアップロード)、令和五年一月二十七日より公開する形としている。なお、「しぶカフェ」(共生社会×渋谷カフェ)とは、リラックスした雰囲気の中で、気軽に学ぶことが出来る場として立案した企画であり、「共生社会」を考える「渋谷カフェ」の略である。

その目的は、本センターのマネジメントによって実施してきた「渋谷学」「共存学」等の取組みをもとに、「多様性」「共生社会」をキーワードに、学内外の話題提供者を交え、持続可能な社会、サステナブルな生き方、SDGsについて考え、それを広く発信することにある。

今後も継続して「しぶカフェ」を実施する予定であるが、今回実施した第一回「しぶカフェ」の開催趣旨は、「渋谷区環境基本計画2018」に基づいて組織された、シブヤサス

テナブル推進協議会(「シブサス」)の活動を通して、渋谷における「サステナブル」(持続可能)な「まちづくり」を考えることにある。

概要

右の開催趣旨に基づき実施された第一回しぶカフェは、シブヤサステナブル推進協議会会員(委員)である古沢広祐氏(國學院大學研究開発推進機構客員教授)、シブヤサステナブル推進協議会リーダーの松嶋範行氏、渋谷区環境政策部環境政策課主任の佐藤龍彦氏、シブヤ若者気候変動会議メンバーの俵里奈氏(國學院大學学生)を招き、幾度かの事前打合せを経て、動画収録及び録画配信を行なったものである。

なお、シブサスは渋谷区環境政策課に事務局を置く組織であり、シブヤ若者気候変動会議は渋谷区環境政策課を事務局、シブサスをアドバイザーとして実施した企画である。

ここに、右の出演者により実施された第一回しぶカフェ「シブサスー東京渋谷で進む環境にやさしいまちづくり」の概要を紹介したい。

第一報告「シブサスとは?」(松嶋範行氏)では、まず「渋谷区環境基本計画2018」に示された渋谷区の取組みに関する説明が行なわれ

るとともに、令和五年(二〇二二)の改定において「意識」の軸が最も重視されていること、行動・意識の変容には環境教育や学習の推進が必要であること等が指摘された。そして、基本計画の中で、リーディングプロジェクトとして設置されたシブサスは、渋谷区における多様なメンバーで構成されること、持続可能な社会の形成に向けて取り組む区民、在勤者、団体、区役所、事業者、学生、学校、来街者が参加し、その提言を受けて、具体的な行動につなげていく存在であること、環境教育などの活動も行なっていること等が紹介された(渋谷区公式ウェブサイト「シブサス(シブヤサステナブル推進協議会)」参照)。

続く第二報告「サステナブルな渋谷in日本」(古沢広祐氏)では、まずサステナブルというキーワードが生み出された経緯について、平成二十七年(二〇一五)に国連「SDGs(持続可能な開発目標)」が定められるまでの流れをもとに説明がなされた。特に、昭和四十七年(一九七二)のストックホルム会議(国連人間環境会議)を契機として、

世界全体がサステナブルに向かうための具体的取組みが始まり、国際条約の締結、地球市民意識の抬頭があったこと等を指摘。こうした動きの中でSDGsが定められ、渋谷においても、「渋谷だからこそのサステナブル」をもっと世界に発信していこうという意識のもと、シブサスの取組みが行なわれることとな

り、その具体例の一つとして、シブヤ若者気候変動会議があると述べた。

そして、第三報告「シブヤ若者気候変動会議の挑戦」(俵里奈氏・佐藤龍彦氏)では、まず佐藤龍彦氏により、シブヤ若者気候変動会議の立ち上げの経緯と、同会議における定例会の開催、グループ議論と発表を行ないながら運営を進めたこと、その成果として令和四年十一月十三日の環境シンポジウムにおいてメンバーの意見を広く発信するに至った経緯等の説明がなされた。続いて、会議に参加した学生メンバーの一人である俵里奈氏により、自ら参加する気候変動対策の市民運動のこと、若者気候変動会議において考えた「ふるさと渋谷フェスティバル」におけるエコアクション案などの説明とともに、カジュアルに気候変動の話ができる空気感を作っていくことの必要性が指摘された。

最後に、古沢広祐氏、松嶋範行氏、俵里奈氏、佐藤龍彦氏によって行なわれた座談会では、シブヤ若者気候変動会議における若者たちの意識の高さが紹介されるとともに、様々な人々との情報共有、具体的な環境問題の発信、アクションが必要であること、新しいことに柔軟に対応できる若者たちの発案が形になっていくことの重要性などが話題となった。

(文責・宮本誉士)

國學院大學博物館

企画展「祓—儀礼と思想—」

研究開発推進機構と祓研究・展示

祓は、祭祀とともに神道の重要な儀礼である。このため、思想の展開も、これと密接にかかわってきた。

國學院大學 研究開発推進機構では、発足以来、伝統文化リサーチセンター、学術資料センター（神道資料館部門）において、祓及びその研究史や本学との関わりに関する研究を進めてきた。近年は、笹生衛「人形の源流と金属製人形の復元」（『館報』一三号、平成二十五年）、学術資料センター編『祓の信仰と系譜』（令和元年）ほかを公刊してきた。これらは、頒布・販売を終了しているが、後者は改訂の上、学術資料センター編『神道の祭りと歴史』（令和五年）に収めた。

國學院大學博物館では、改称前の伝統文化リサーチセンター資料館開館以来、

- ・企画展「祭祀遺跡・神社祭礼・國學院の学術資産」のうち「文献に見る祓の世界」（会期・平成二十五年五月十二日～七月二十六日）
- ・企画展「おはらいの文化史」（平成二十二年七月二十六日～九月二十五日）

・特集展示「夏越祓」（令和元年五月二十八日～六月二十三日）

をはじめ、幾度か祓に関する展示を開催してきた。

本年開催の國學院大學博物館企画展「祓—儀礼と思想—」（会期：令和五年五月二十日～七月九日）は、上述した、これまでの研究・展示や、研究開発推進センターで行っている、本学が所蔵する神道・日本文化関連資料についての調査成果などを踏まえている。

展示構成

以下、各章の概要を示す。

【第一章】 祓とは

祓は、古くは罪を贖うために麻や様々な祓物を差し出すものであった。やがて平安時代になると、罪を解除し、穢を除くために大麻、切麻、解繩、散米、人形ほか、祓の具として用いられるようになる。その後、祓神事から個人祈禱まで、様々な祓が行われるようになり、現在に至る。

本章では、祓具（伊勢殿神社所蔵）ほかの資料を展示した。

【第二章】 祓の淵源—神話と儀礼—

祓に対する信仰の淵源は『日本書紀』『古語拾遺』などに記された素戔嗚尊の神話に求められる。国家に

よる祓儀礼として大祓が挙げられる。これは、毎年、六月・十二月の末日に、朝廷の官人たちの半年間の罪を除くものであった。この大祓は臨時にも行われた。また、道教に由来する人形を用いた除病・除災の儀礼の要素も加わり、祓儀礼が形成されていく。

【第三章】 祓の祈禱と思想—中臣祓の成立—

平安時代中期頃には、穢や邪気などを祓うために中臣祓が用いられるようになる。これに積極的に関与したのは、陰陽師たちであった。この祓が貴族層を中心に普及すると、僧の姿をした法師陰陽師たちもおこなうようになり、また祓を取り込んだ密教修法も形成された。

このような祓の変容の中で、中臣祓の注釈書も形成され、仏教の概念と重ね合わせた注釈が付されるなどした。また、唯一神道（吉田神道）を創唱した吉田兼俱は、中臣祓の講義を行った。

【第四章】 祓と道徳—実践と神学—

江戸時代、吉田家は、全国各地の神職を門人としていった。これにより、吉田家の祓作法や中臣祓の本文が各地の神職たちに受容されていった。思想面では、儒学（朱子学）の影響による神道の理論化が進む。ここの中臣祓は、人として生きるための修養法となり、これは理想的な国家観や人々の心の邪念を穢とする神学も展開した。これは実践も伴

い、中臣祓を唱えることで心身が清浄となる境地が求められた。

【第五章】 大祓詞と学問—国学から近代人文学へ—

国学は、古典を読み解くことを重視する総合的学問である。国学者たちは、古代の大祓に用いられた「六月晦大祓」（『延喜式』卷八）を研究するようになり、それを「大祓詞」と呼んだ。国学をはじめとする、江戸時代以来の学問が近代人文学へと再編される中で、「六月晦大祓」をはじめとする祝詞研究や神道の歴史の中での祓の儀礼・思想の研究も深められた。本学は、明治十五年（一八八二）に皇典講究所が創立されたことを出発点とし、この学問の動きとも密接にかかわった。

本学出身で、のちに教授・学長を務めた河野省三は、中臣祓関係資料を多く収集した。これらは、戦前、本学において展示されることもあり、本展でも数多く展示した。

【第六章】 現代の祓と用具

現在もちいられている祓具ほかを展示し、解説を付した。茅の輪については、金王八幡宮に写真をご提供いただいた。また、本章では、神社本庁、教派神道連合会にご協力いただき、神社本庁、神習教、神道扶桑教、大本でもちいられている祓詞や御嶽教の形代等を展示した。

（文責・大東敬明）

蒙古襲来七五〇周年を見据えて

—企画展開催に向けた取り組み—

十三世紀前半、ユーラシア大陸に広大な支配地域を築いたモンゴル(蒙古)帝国(一二七一年十一月にモンゴル皇帝フビライが国号を大元に改めた後は一般に元とする)は十三世紀後半に入り、二度にわたって日本への侵攻を図った。これを日本では元寇(近年では蒙古襲来あるいはモンゴル襲来)と呼ぶ。

一度目の蒙古襲来は当時の日本で採用されていた暦では一二七四年一〇月、二度目は一二八一年五〇閏七月のことであった。日本の元号では一度目が文永十一(元では至元十一)年、二度目が弘安四(元では至元十八)年であったことから、日本史研究ではこれをそれぞれ文永の役、弘安の役と呼び習わしている。

島嶼国家である日本にとって、蒙古襲来は他国が海を越えて侵攻してきた未曾有の経験であった。このため、戦闘に関わった当事者だけでなく、日本国内のさまざまな人々の間で、これを「国難」とする共通認識が醸し出され、後世に伝えられた。

さらに、二度目の蒙古襲来である弘安の役の際、圧倒的な兵力を擁した元軍船団が暴風雨によって一夜のうちに壊滅状態に陥った現象は、日本が「国難」に陥った際には神仏が救うという「神風」の思想を生み出

し、これがその後の日本社会に大きな影響を及ぼすこととなった。

実際に戦前の日本史教科書に見られた蒙古襲来の記述では「神風」が取り上げられ、日本が国際的な緊張関係に見舞われた際には、これを解決するために「神風」が生じるといふ思想が広く喧伝されたのである。

戦後に至り、蒙古襲来については文献史学及び水中考古学による実態の転換が図られた。その一環として、一九八〇年代からは弘安の役の舞台の一つとなった長崎県と佐賀県の県境に位置する伊万里湾での水中考古学手法を用いた調査研究が進められつつある。

その結果、一九八一(昭和五六)年には伊万里湾の湾口を塞ぐ位置にある鷹島の南海岸周辺において、多くの蒙古襲来関連遺物が得られたことから、鷹島南海岸線延長七・五メートル沖合二〇〇メートルの海域は蒙古襲来に関連する「鷹島海底遺跡」として周知化された。これを受け、この海域で計画される港湾工事などの際には事前の確認調査が義務付けられることとなり、鷹島床波港や神崎港では改修工事に伴う発掘調査が行われて、さまざまな蒙古襲来関連遺物が検出されている。

また、二〇一一(平成二三)年と二〇一四年には、池田を研究代表者とする科学研究費による研究チームによってこの海域において鷹島一号沈没船及び鷹島二号沈没船が発見された。これを契機として、二〇一四年三月には鷹島の神崎港沖合海域を中心とする三四万八〇〇〇平方メートルの海域が水中遺跡としては日本で初めての国指定史跡「鷹島神崎遺跡」となった。

鷹島一・二号沈没船の発見や「鷹島神崎遺跡」の国史跡指定は多くの人々の水中遺跡の調査や蒙古襲来についての関心を再喚起することになったが、折しも二〇二四(令和六)年は一度目の蒙古襲来である文永の役からちょうど七五〇年目に当たる。

このことを念頭におき、國學院大學研究開発推進機構では、二〇二一年度に「公開学術講演会」及び「日本文化を知る講座」として、「蒙古襲来の実態とその影響」をテーマとして、たりモート講演会を開催した。その内容については、『國學院大學研究開発推進機構ニュース』通巻三〇号(Vol.1No.3)に採録している。

本講演会では、鷹島海底遺跡における水中考古学的調査の進行状況とともに、蒙古襲来に直面した人々が行った神仏への「異国降伏(調伏)祈禱」に関する研究や、蒙古襲来が中世以降の神話や八幡信仰に及ぼした影響、さらにはその後の近世・近代における「神風」及び「神国」思想の展開過程などに関する研究など、蒙古襲来が現在においてもさまざま

な研究課題を惹起している状況が確認された。

この成果を踏まえ、文永の役後七五〇年となる二〇二四年度には研究開発推進機構として、蒙古襲来に関するいくつかの取り組みを行うことが決定された。その一環として、國學院大學博物館での蒙古襲来に関する企画展の開催を予定している。また、そのための準備を兼ねた機構内の研究会を二〇二二年度から開始することとした。

研究会では二〇〇六年度から継続して日本学術振興会科学研究費補助金を受けた鷹島海底遺跡における水中考古学的調査研究に従事している池田に加えて、内川隆志、大東敬明、深澤太郎が参加して、鷹島海底遺跡における調査研究状況や、蒙古襲来及び「蒙古襲来絵詞」に関する新たな研究動向の確認作業などを月一回程度の頻度で進めている。これを踏まえつつ、今後は学内外の研究者の参加拡充を図り、先述したさまざまな研究課題に関する検討を進める予定である。

加えて、二〇二四年度の國學院大學博物館での企画展開催に向けた今後の調査研究のために必要な外部資金を獲得する試みについても、鋭意開始している。

本研究会の今後の活動については学内外に広く周知化しながら展開したいと考えている。関心のある方々の積極的な参加を求めたい。

(文責・池田榮史)

彙報

会議

○全体

- ・令和四年度第五回運営委員会、令和五年二月九日(木)、若木タワー地下一階会議室○二
- ・令和四年度臨時運営委員会、令和五年三月八日(水)、若木タワー地下一階会議室○二
- ・令和五年度第一回運営委員会、令和五年五月十一日(木)、若木タワー地下一階会議室○二
- ・令和四年度第六回企画委員会、令和五年三月八日(水)、AMC棟五階会議室○六
- ・令和五年度第一回企画委員会、令和五年四月十九日(水)、AMC棟五階会議室○六

○日本文化研究所

- ・令和四年度第六回所員会議、令和五年三月七日(火)、オンライン会議
- ・令和五年度第一回所員会議、令和五年四月十二日(水)、オンライン会議

○校史・学術資産研究センター

- ・令和五年度第一回校史・学術資産研究センター会議、令和五年五月二十四日(水)、オンライン会議

○研究開発推進センター

- ・令和四年度第三回研究開発推進センター会議、令和五年三月十四日(火)、オンライン会議
- ・令和五年度第一回研究開発推進センター会議、令和五年五月二十四日(水)、オンライン会議

○國學院大學博物館

- ・令和五年度第一回國學院大學博物館会議、令和五年四月二十六日(水)、AMC棟地下一階博物館ワークショップスペース

公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

○全体

- ・研究開発推進機構FD研修「デジタルミュージアムに関して」、令和五年三月八日(水)、AMC棟五階会議室○六、講師Ⅱ及川聡(本学学術メディアセンター事務部長)

○研究開発推進センター

- ・第一回「しぶかフェ」シブサス(東京渋谷で進む環境にやさしいまちづくり)、令和五年一月二十七日(金)、オンライン配信、講師Ⅱ松嶋範行(シブヤサステナブル推進協議会リーダー)「シブサスとは?」、古沢広祐(本学研究開発推進機構客員教授)「サステナブルなシブヤin日本・世界」、佐藤龍彦(渋谷区環境政策部環境政策課主任)・俵里奈(シブヤ若者気候変動会議メンバー・國學院

大學学生)「シブヤ若者気候変動会議の挑戦」

出張

○学術資料センター

- ・深澤太郎、「三宅島における神事芸能の研究と教育普及」のため、令和五年二月二十八日(火)～三月一日(水)、東京都三宅村
- ・深澤太郎、「博物館連携事業に関する事前打ち合わせ」のため、令和五年三月十日(金)～三月十一日(土)、福岡県福岡市、太宰府市
- ・深澤太郎、「建錡山遺跡の再測量」のため、令和五年三月二十一日(火)～三月二十三日(木)、福島県白河市
- ・深澤太郎・吉永博彰・高橋あかね、「静岡県三島市における三嶋信仰閣連資料の調査」のため、令和五年五月十七日(水)、静岡県三島市

○研究開発推進センター

- ・木村大樹・大貫大樹、「皇學館大學研究開発推進センターとの研究連携に関する打ち合わせ及び資料調査」のため、令和五年三月二十二日(水)～三月二十四日(金)、三重県伊勢市

刊行物

○全体

- ・研究開発推進機構『機構ニュース』通号三十二(令和五年三月二十五日発行)
- ・研究開発推進機構『國學院大學研究開発推進機構紀要』第十五号(令和五年三月三十一日発行)

○日本文化研究所

- ・日本文化研究所『二〇二一年度国際研究フォーラム「日本の宗教文化を撮る」報告書』(令和五年二月二十八日発行)

○学術資料センター

- ・学術資料センター『神道の祭りと歴史』(令和五年三月三十一日発行)

○校史・学術資産研究センター

- ・校史・学術資産研究センター『校史・学術資産研究』第十五号(令和五年三月六日発行)

- ・校史・学術資産研究センター『校史』第三十三号(令和五年三月六日発行)

○研究開発推進センター

- ・研究開発推進センター『研究開発推進センター研究紀要』第十七号(令和五年三月十日発行)

○國學院大學博物館

- ・國學院大學博物館『國學院大學博物館研究報告』第三十九輯(令和五年二月二十八日発行)

令和5年度 國學院大學 研究開発推進機構 事業計画及び人事一覧（事業別）

* 研究事業代表者

令和5年6月1日現在

機関	研究事業名	専任教員	兼任教員	客員研究員	ポストク研究員	研究補助員	客員教授	共同研究員	
日本文化研究所	宗教文化に関する研究と学術情報発信の体制構築 (R 4～5年度)	※ 星野靖二 吉永博彰 川嶋麗華	飯倉義之 遠藤 潤 黒崎浩行 平藤喜久子 松本久史 シッケタンツ・エリック		大場あや 木村悠之介 高田 彩 武井謙悟 藤井修平	長見菜子 鳴海あかり 牧田小有玲	井上順孝 櫻井義秀 ナカイ・ケイト 林 淳 ヘイヴンス・ノルマン 山中 弘	天田顕徳 一戸 渉 今井功一 今井信治 エニスタージョン 萩原 稔 小田真裕 小平美香 小高絢子 ガウニス・ヤニス 齋藤公太 芹口真結子	塚田穂高 問芝志保 丹羽宣子 野口生也 原田雄斗 ヒル・マツシバ フレレ・カール 牧野元紀 三ツ松誠 宮澤安紀 村上 晶 矢崎早枝子
	学術資料センター(考古学資料館部門) 事業	池田榮史 深澤太郎	※ 青木 敬 内川隆志 黒崎浩行 笹生 衛 谷口康浩 吉田敏弘 大日方一郎	阿部常樹 鳥越多工摩		岩瀬春奈 大山晋吾	橋本裕之	荒井裕介 石井 匠 石川岳彦 伊藤大祐 植田 真 奥山 香 尾上周平 加藤元康 菊地大樹 北澤宏明 楠恵美子 栗木 崇	黒田迪子 惟村忠志 齋藤しおり 大工原豊 田口哲也 土屋健作 野藤 妙 平本謙一郎 二本泰史 壬生友子 山口 晃
学術資料センター	学術資料センター(神道資料館部門) 事業	大敬 明 吉永博彰 木村大樹	※ 加瀬直弥 笹生 衛 鈴木聡子			高橋あかね	伊藤 聡 岡田莊司	塩川哲朗 水谷 類	
	校史・学術資産研究センター事業	大東敬明 渡邊 卓 比企貴之	※ 加瀬直弥 笹生 衛 野中哲照 藤田大誠 松本久史 矢部健太郎 手塚雄太	高橋俊之 高見澤美紀	齊藤みのり		根岸茂夫	遠藤珠紀 金子 拓	高野裕基
研究開発推進センター	研究開発推進センター研究事業「神道・日本文化の先端的研究」	大東敬明 宮本誉士 新井大祐 木村大樹 半田竜介	※ 太田直之 加瀬直弥 藤田大誠 松本久史		大貫大樹			河村忠伸 黒岩昭彦 小林威朗 坂井久能 佐藤一伯 大丸真美 高原光啓	武田幸也 戸浪裕之 中野裕三 野田安平 宮澤佳廣 森 悟朗 吉田扶希子
	「(SDGs) と建学の精神」研究事業 (R 4～8年度)	星野靖二 宮本誉士 新井大祐	※ 菊田真司 菅 浩二 藤本頼生 松本久史 手塚雄太	秋野淳一	伊藤新之輔 高橋亮一		上山和雄 古沢広祐	今泉宜子 康 成文 高久 舞 西俣先子	冬月 律 吉田律人 吉野 裕
	國學院大學「古典文化学」の創出研究事業 (R 4～8年度)	渡邊 卓 半田竜介	※ 上野 誠 大石泰夫 谷口雅博 土佐秀里 西岡和彦 松本久史 荒木優也	鶯橋辰成 小野諒巳 キロス・イグナシオ	中山陽介 古畑侑亮	鈴木健多郎	辰巳正明	大谷 歩 大沼宜規 城所喬男 倉住 薫	神宮咲希 鈴木道代 曹 咏梅
國學院大學博物館	國學院大學博物館事業	池田榮史 大東敬明 深澤太郎 渡邊 卓 吉永博彰	※ 内川隆志 笹生 衛				金子皓彦 小林達雄 朱 岩石 椋山林繼 福尾正彦 古谷 毅 三橋 健 茂木雅博 柳田康雄	粕谷 崇 田中 潤 中村 大 中村耕作	バジュ・ロナ 安高啓明 山本哲也

令和5年度 國學院大學 研究開発推進機構 人事一覽

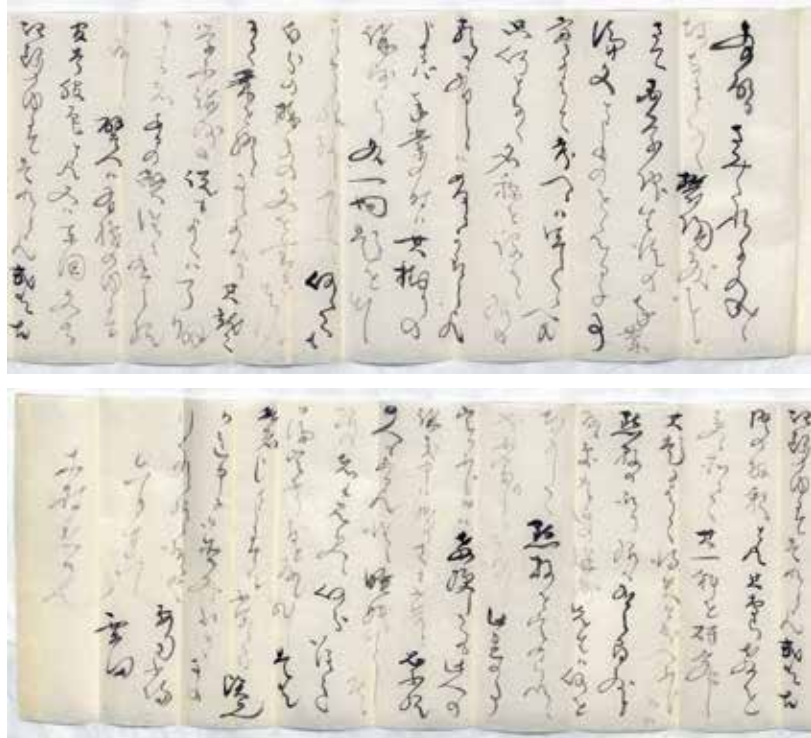
機構長	笹生 衛	
日本文化研究所長	平藤喜久子	
学術資料センター長	内川隆志	
校史・学術資産研究センター長	松本久史	
研究開発推進センター長	松本久史	
國學院大學博物館長	笹生 衛	
國學院大學博物館副館長	内川隆志 及川 聡	
専任教員	教授	池田榮史 大東敬明 深澤太郎 星野靖二 宮本誉士
	特別招聘教授	サンド・ジョルダン
	准教授	新井大祐 齊藤智朗 渡邊 卓
	助教	吉永博彰
	助教(特別専任)	川嶋麗華 木村大樹 半田竜介 比企貴之
兼任教員	教授	青木 敬 飯倉義之 上野 誠 内川隆志 遠藤 潤 大石泰夫 太田直之 加瀬直弥 菊田真司 黒崎浩行 笹生 衛 菅 浩二 谷口雅博 谷口康浩 土佐秀里 西岡和彦 野中哲照 平藤喜久子 藤田大誠 藤本頼生 松本久史 矢部健太郎 吉田敏弘
	准教授	荒木優也 シッケタンツ・エリック 鈴木聡子 手塚雄太
	助手	大日方一郎
研究員	客員研究員	秋野淳一 阿部常樹 鶉橋辰成 小野諒巳 キロス・イグナシオ 高橋俊之 高見澤美紀 鳥越多工摩
	ポストドク研究員	伊藤新之輔 大貫大樹 大場あや 木村悠之介 齊藤みのり 高田 彩 高橋亮一 武井謙悟 中山陽介 藤井修平 古畑侑亮
	研究補助員	岩瀬春奈 大山晋吾 鈴木健多郎 高橋あかね 長見菜子 鳴海あかり 牧田小有玲
客員教授	伊藤 聡 井上順孝 上山和雄 岡田莊司 金子皓彦 小林達雄 櫻井義秀 朱 岩石 梶山林繼 辰巳正明 ナカイ・ケイト 根岸茂夫 橋本裕之 林 淳 福尾正彦 古沢広祐 古谷 毅 ヘイヴンス・ノルマン 三橋 健 茂木雅博 柳田康雄 山中 弘	
共同研究員	天田顕徳 荒井裕介 石井 匠 石川岳彦 一戸 渉 伊藤大祐 今井功一 今井信治 今泉宜子 植田 真 エーニルス・ラーション 遠藤珠紀 大谷 歩 大沼宜規 荻原 稔 奥山 香 小田真裕 小平美香 小高絢子 尾上周平 ガイタニデイス・ヤニス 粕谷 崇 加藤元康 金子 拓 河村忠伸 菊地大樹 北澤宏明 城所喬男 楠恵美子 倉住 薫 栗木 崇 黒岩昭彦 黒田迪子 康 成文 小林威朗 惟村忠志 齋藤公太 齋藤しおり 坂井久能 佐藤一伯 塩川哲朗 神宮咲希 鈴木道代 芹口真結子 曹 咏梅 大工原豊 大丸真美 高野裕基 高原光啓 高久 舞 田口哲也 武田幸也 田中 潤 塚田穂高 土屋健作 問芝志保 戸浪裕之 中野裕三 中村 大 中村耕作 西俣先子 丹羽宣子 野口生也 野田安平 野藤 妙 パウシュ・イローナ 原田雄斗 ビュテル・ジャン＝ミシェル 平本謙一郎 二木泰史 冬月 律 フレーレ・カール 牧野元紀 水谷 類 三ツ松誠 壬生友子 宮澤安紀 宮澤佳廣 村上 晶 森 悟朗 矢崎早枝子 安高啓明 山口 晃 山本哲也 吉田扶希子 吉田律人 吉野 裕	

令和5年度 事務局人事

学術メディアセンター事務部長	及川 聡
学術メディアセンター事務部図書担当次長	澤井 隆
学術メディアセンター事務部研究開発推進機構担当次長	飯塚陽子
学術メディアセンター事務部研究開発推進機構事務課 國學院大學博物館担当 國學院大學博物館学芸員	佐野真之 相川由起 宮本千夏子 三塚広椰 東海林由光 志水志保 三島 隆 佐々木理良 尾上周平 網谷哲成(兼務)

資料紹介
栗田寛書簡(木村春太郎宛)

—成績の判定と口頭試問—



一八九七(明治三十)年六月二十六日、江戸後期・明治期の史学者である栗田寛(天保六年(一八三五)一八九九年)が、皇典講究所教員で幹事補であった木村春太郎(生没年未詳)に宛てた書簡である。

内容は、國學院生徒(第五期生)の卒業論文を披閱したこと、その実証的態度は一定程度認めるものの、一方で安易な用語の創出などが目に付くこと、また卒業の可否を判定するにあたっては口頭試問をおこなうべきこと、従来、どのようにして可否を判断していたか基準が不明であるが、平生生徒のなかにはきつと居眠りをするような者もいることだろうなどといった、栗田の忌憚なき所感を伝えるものである。散々放言した挙げ句、「拙者(栗田)からの意見とするのでは角が立つから、賢兄(木村)の胸三寸で良きように取り計らってくれ」というのは、多少の遠慮であろうか。

栗田といえば大日本史類の編修にその生涯を懸けたことで知られるが、一八九二年の東京帝国大学文科大学教授の着任前後から、國學院でも「王政史(二)」を担当している。ちなみに一八八五年に栗田の授業を受けた鳥野幸次は、のち「二年間『氏族志』の講義をうかがいました。紋付きに羽織袴の先生は水戸弁そのままの大声で、ゆっくりと非常にききよい講義であったと思います。半面厳格な時間であったと思います。」と述懐し、栗田の端正な講義のようすが彷彿とされる。

一方の木村は、一八八〇年に皇典講究所を卒業すると同時に同所の教師兼学生生徒取締掛となる。一八八

四年、皇典講究所の財政窮乏が極致に達した際には、経営の頹勢挽回のため事業拡張委員となるや、財政基礎の貧弱を看破し、幹事長に財政整理・職員制および給与規程の改定について献言した、校史上の重要人物である。

一八九六年、佐佐木高行が皇典講究所長・國學院長に就任すると、人事の刷新を企図し職員の更迭が進められ、所長直下の所務処理を担う幹事補に木村が据えられた。他方、皇典講究所・國學院の諮問機関として評議会が設けられ、講師からは本居豊頼・井上頼圀そして栗田の三名が入っている。栗田と木村の邂逅および親交は、佐佐木体制下にてえられたのだろう。

以上を念頭に書簡に立ち返れば、皇典講究所・國學院存亡の危機の只中にもかかわらず、当時、教員・講師がよく連携しながら一人ひとりの生徒の成績判定に誠意を尽くしていたようすを読み取ることができ。なお、第五期には日本中世史研究史上に大きな足跡を残した八代国治も在籍するなど、いわゆる豊作の年であったので、問題の生徒が誰なのかといったところである。

ここに卒業認定ないしは学位認定にかかる最終試験は、提出論文について指導教員および主題に見識もつ審査員を交えての口頭試問というのが定石である。本学の口頭試問の淵源が栗田の献言を契機とするのかは不明だが、この書簡は高等教育機関一般における卒業試験のルーツの一端を示す資料として注目すべきものといえよう。

(文責・比企貴之)

拝啓(五月朔)みたれに相成候」故、なにとなく鬱陶敷被存

さて國學院生徒の卒業「論文と申ものを見るに、事」実によりて考へ候ハ宜しく候へ共、「只何となく名称を設け候右の」類も有是ハ、如何に可有之哉、「申さバ卒業の時ハ、其掛りの」講師より各一問題を出し可被申候様致し不申候へハ、何二ても」自分の勝手な文を書き、それ」にて業を修候事に相成り、其就て」学ふ講師の説もよくハ了解」せざる者あるの弊、嗚々有是様」に存し候、譬へハ有職の内にて「官号服色と哉、又ハ系図、文書、「記録の内にて是れと哉、或者古」語の解釈と哉、其専ら教を」受候所にて其教科を研究し、其題によりて得失を考へ不申候てハ、「点数の取り様も有之間敷と」存候處、是迄の講師先生ハ何を」本にして点数を定められ候」や、不審の事に被存候、此邊の事」一定り不申候ハ、教授しても此人の」講義中ハ眠りても不苦と思ふ様」の人もあり候哉、嗚々睡眠いたし候」様の者も見受候、何分御注意」御論定あり度と存し候、然し是は」拙者申候と申にては不宣候間、賢兄」か意中に御望み度き事の」いはれ候様に存候也、要用不備

六月廿六日
栗田
木村春兄